

8/14 新旗

受診控え 持病悪化

新型コロナウイルス感染症の影響で患者が受診を控え、持病を悪化させる事例が続発しています。現場の医師は、「受診控えはコロナ感染を警戒している人だけでなく、非正規労働者に顕著だ。生活が苦しい人が多く、本当に胸が痛む」と語ります。新型コロナの収束が見通せないもと、受診控えの長期化に不安を募らせています。
(松田大地)

全国保険医団体連合会(保団連)の調査に寄せられた受診控えの影響=事例を要約=

| | | |
|-------------------------------------|------------------------------------|-----------------------------------|
| コロナで半年ほど受診できず、診察時には進行乳がんの状態に。 | 緑内障で治療中だったが、眼圧上昇の発見が遅れ、失明。 | 2歳児が尿路感染症を悪化させ、入院。 |
| 4月上旬に骨折し、5月中旬に受診。骨折部分のずれが進行し手術に。 | 1月に腫瘤を自覚。4カ月たってから受診すると「舌がん」と診断。 | 傷やかぶれなど初期治療を自分で行い、腫れあがってからの来院例多数。 |
| 通院やデイサービスを控え、高齢者の身体機能(ADL)や認知機能が低下。 | 解雇されたため歯科受診をキャンセル。痛みを数カ月我慢。口腔内が悪化。 | 重症化によって抜歯ケースが増加。 |

コロナ影響…非正規で続発

7月下旬、茨城県内で佐藤太郎医師(仮名、70代)が営む診療所に、30代男性が妻に支えられて2カ月ぶりに受診しました。長く患っている糖尿病が悪化し、両目はほぼ失明していました。

もともと症状が重く、1〜2週間おきの通院を促していました。受診できなかった理由を佐藤医師が聞くと、男性は「コロナで派遣の仕事がためになって来られなかった。目が見えなくて、もう仕事はできない。ここまで通うのも難しい」と肩を落としたと言います。

注射量を「節約」
佐藤医師は、「糖尿病が悪化すると分かっていでしょうに、血糖値を下げるインスリンの自己注射量を半分くらいに「節約」していたんだと思います」と語ります。
「会社が倒産して金がない」と1カ月半も受診を我慢し、網膜症や腎症など合併症を引き起こす寸前まで悪化した人もいました。受診しても「持ち合わせがない。検査はやめてくれ」と拒む人も多く、詳しく調べ

職失い2カ月ぶり診察 ほぼ失明

ることもできないと憂えます。

支援待ったなし
「もともと血糖値がコントロール不良の重症患者の場合、受診控えはすぐさま生死に関わります。安心して受診できるように、患者負担を軽減するなどの補助がもっと手厚ければいいのですが…。職を失った人や非正規労働者の受診控えはますます増えると思う」

深刻化する受診控えを防ぐため、国の支援・保障対策の拡充は待ったなしです。
茨城県保険医協会の調査では、新型コロナに伴う受診控えなどで外来患者数が減った医療機関は9割超でした。そのうち4割の182医療機関で患者の症状悪化を確認。糖尿病患者の血糖コントロール不良や合併症の重症化が最多で、緊急入院した人もいました。
全国保険医団体連合会のアンケート調査でも、受診控えに伴う、がんや心不全、糖尿病の進行・重症化などの事例(表)が多数紹介されています。

(2面17〜18頁)